

金沢城の庭園

滝川 重徳（石川県金沢城調査研究所）

The Gardens of Kanazawa Castle

TAKIGAWA Shigenori (Kanazawa Castle Fieldwork and Research Office)

はじめに

加賀・能登・越中に領地を有した加賀藩の本城、金沢城の一带には、特別名勝として現存する兼六園を始め、近世にはいくつかの庭園が形成された（図1・2）。石川県金沢城調査研究所では、庭園を城郭の多様な性格を示す要素と捉え、遺構・絵図・文献史料等による総合的な調査研究に取り組んでいる¹⁾。本報告では、城の構造、とくに御殿空間との関わり²⁾を意識しながら、庭園の変遷とその特徴について概観したい。

1. 金沢城庭園の概略と現況

（1）本丸・東ノ丸庭園

寛永8年（1631）以前の御殿に付属した。初期は茶室に伴う露地（茶庭）が存在したとみられる。17世紀

初頭には、表（東ノ丸南部）・奥（本丸北部）ともに池庭が配置された。寛永8年の大火を契機に御殿が二ノ丸に移転すると、庭園も廃絶となった。

本丸北部の庭園は地表上に痕跡を留めておらず、存在自体不明瞭であったが、平成16年度以後の埋蔵文化財確認調査で池遺構の一部が検出された。近代に陸軍の弾薬庫が構築された際、かなりの範囲が損壊を受けたと推定される。

東ノ丸南部の庭園についても、池遺構や築山は近世を通じ名残を留めた程度であり、近代以後にも埋め立てを受けたことから、やはり詳細は不明な状況にあった。平成17年度以後の埋蔵文化財確認調査により、池遺構の一部が検出された。

（2）二ノ丸庭園

寛永8年の大火後、二ノ丸御殿に付属・一体化する



図1 上空からみた金沢城跡・兼六園

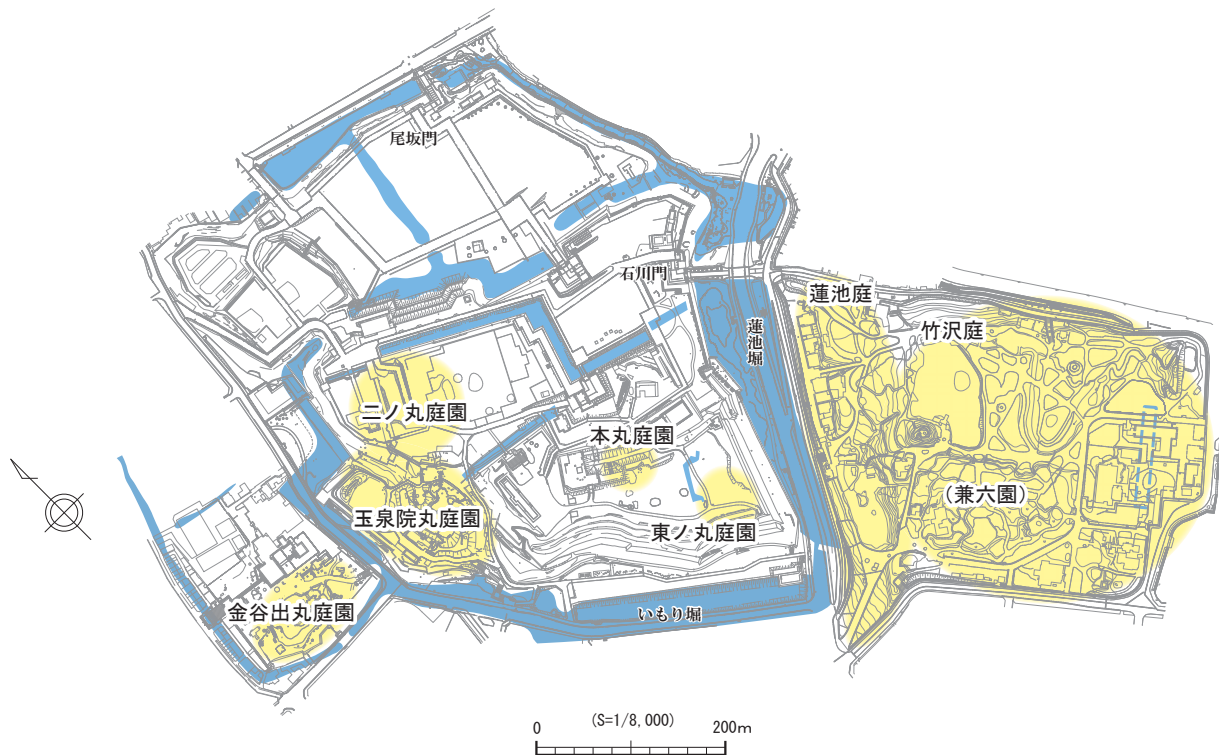


図2 金沢城庭園の位置

かたちで造営され、建物間を巡る辰巳用水による流れを中心に、小庭園が連続する景観を呈していた。

現況では地表上にほとんど痕跡を留めておらず、石垣に組み込まれた石樋等が、庭園の流れの存在を暗示するのみとなっている。二ノ丸御殿と周辺の発掘調査（昭和43・44・52、平成11・13年度）では、辰巳用水の可能性がある埋樋痕跡の他は、明確な庭園関連の遺構は確認されていない。なお南部の居間先土蔵・納戸土蔵周辺については、ボーリング調査で池の堆積層とみられる土層が検出されている。

(3) 玉泉院丸庭園

寛永11年（1634）に造営された。御殿のある二ノ丸の西側下、落差のある郭に立地するが、通路（松坂）で結ばれ緊密な関係が窺える。初期金沢城期の堀を改修した池と、東側斜面に築かれた、意匠性の高い石垣群が主な構成要素である。

近代以後改変が進み、近年まで地表上には、周辺の石垣の他、池北部が半ば埋まりながら姿を留めていたのみであった。平成20年度以後、公園整備事業に係り埋蔵文化財確認調査が実施され、池や庭園東部についてはおおよそ近世の遺構が遺存していることが明ら

かになった。発掘調査成果や絵図情報により復元整備が行われ、現在に至っている。

(4) 金谷出丸庭園

17世紀後半、城内中枢から離れた西端の平坦な段丘上に、書院（座敷）を擁する庭園空間として成立した。17世紀末期からは御殿敷地に隣接し、安永4年（1775）頃には御殿に取り込まれ、泉水等も縮小するが、19世紀初期には、馬場を主とする外庭・畑・御殿と一体化した内庭という区画組成が成立する。一方で泉水（流れ・池）を主体とした構成要素は、10年程度の単位で著しく変容した。

慶応～明治初期に大きく改修された最終段階の庭園が、御殿建物撤去後も存続し、尾山神社境内の庭園として現存している（県指定名勝・尾山神社庭園（旧金谷御殿庭園））。

(5) 蓮池庭

延宝4年（1676）、蓮池（百間）堀の南東側にあった作事所跡地に造営された。当初は金谷出丸と同様座敷（書院）を中心とした空間であった。19世紀初頭には、隣接する竹沢御殿の外庭に位置付けられたが、御殿の建物が解体されるに及び、竹沢庭との一体化への道を

歩んだ。台地縁辺にあって起伏に富んだ地形を占め、翠滝等見所が多い。

明治初期に門や亭等の建物が撤去され、原位置を保つ建物は夕顔亭(内橋亭は霞ヶ池池畔に移転)のみとなった。また明治7年(1874)に兼六公園となって以降一般に開放され、処々改変があったが、園路や水路等は、多くの場合近世の位置を踏襲しており、全体として地割・構成要素が良く保存されている。特別名勝兼六園の北西側に相当する。

(6) 竹沢庭

文政5年(1822)に完成した、12代藩主^{なりなが}前田齊広の隠居所・竹沢御殿に伴い造営された。当初は敷地北西側の小規模な庭園であったが、齊広の死去後に建物が撤去されると、蓮池庭を凌駕する広大な庭園となった。万延元年(1860)に両庭園は一体化し、現況に近い景観が形成されるに至った。

高台に展開する泉水(池・流れ)・築山等の見所に加え、石垣・土塀基礎・通路跡(段状遺構)・水道等の構成要素の一部が遺存している。敷地南東には成翼閣(重要文化財、旧翼御殿)や金沢神社(竹沢鎮守)がある。特別名勝兼六園の南東側に相当する。

2. 金沢城庭園の変遷と特徴

(1) 天正期 ―茶室に伴う露地―

金沢城は、天文15年(1546)に成立した一向一揆・本願寺勢力の拠点金沢御堂を前身とし、天正8年(1580)、織田信長の家臣佐久間盛政が普請したと伝わる。佐久間氏の在城は短く、天正11年(1583)に前田利家が入城してからは、明治4年(1871)まで加賀前田家の本城であった。

前田利家入城以前とその当初の資史料は少なく、庭園についても明確ではないが、天正15年(1587)に来訪した南部家家臣の覚書(『北信愛覚書』^{のぶちか})には、本丸と思しき城内の数寄屋に伴う露地の記載があり、松・杉・竹が植えられ、腰懸・飛石・手水鉢等が配されていたことが窺える。覚書では様々なもてなしを受けている様子が記されるが、庭に関する記載は他には見当たらない(主要参考文献10)。築城間もない金沢城では、露地(茶庭)以外は、客人をもてなす庭が備わっていなかった可能性も考えられる。

(2) ～寛永8年(1631)頃(図5②)

―初期の御殿に付属し、ともに廃絶―

寛永8年の大火まで、金沢城の中核は城内最高区域の本丸一帯であり、天守(慶長7年(1602)焼失)や御殿があったが、具体的な空間構成は不明なところが多い。ただし発掘調査・ボーリング調査では、出入口の状況・本丸一帯の地盤高等の所見を得ており、この点からおよそ本丸西側が「奥」側、本丸東側～東ノ丸が「表」側に相当したと考えられる。

庭園については、絵図・文献に若干の記載がある一方、発掘調査・ボーリング調査により、北西(本丸北部)・南東(東ノ丸南部)の二か所で池遺構が確認されている。

本丸北部池遺構(図3・4)は、近代の陸軍弾薬庫掘り込み斜面の精査により検出された。地盤は元和7年(1621)造成の盛土である。平面形は不明であるが、検出長23m、深さ2.1～2.6mの遺構で、底面際に護岸の景石(福浦石と称される能登産出の安山岩)が遺存していた他、出土石材片から、様々な岩石種の景石・石造物が設けられていたことが分かった。



図3 本丸北部池遺構検出状況

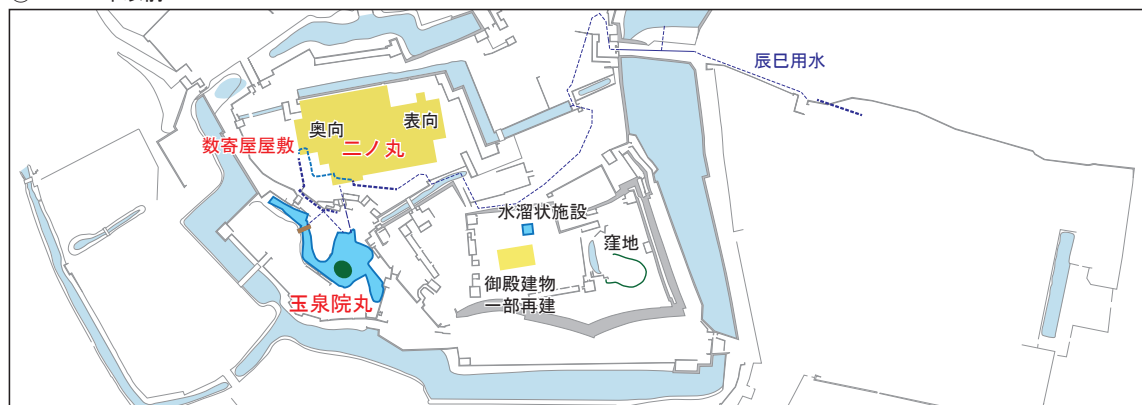


図4 本丸北部池遺構底面



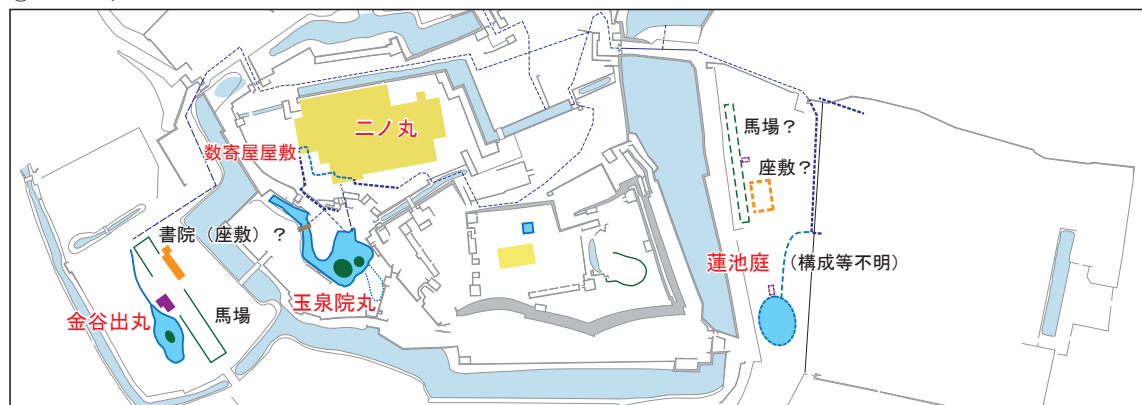
② 1631 年以前

本丸御殿の表・奥に庭園付属～御殿とともに廃絶



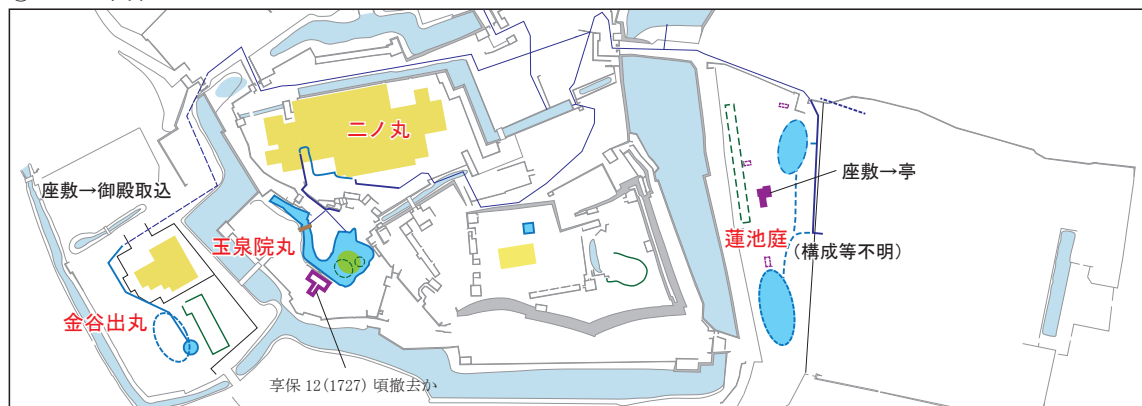
③ 1631 年～

二ノ丸御殿と御殿奥側に隣接する玉泉院丸に庭園造営、辰巳用水の供給



④ 1660 年頃～

金谷・蓮池に庭園主体の空間成立

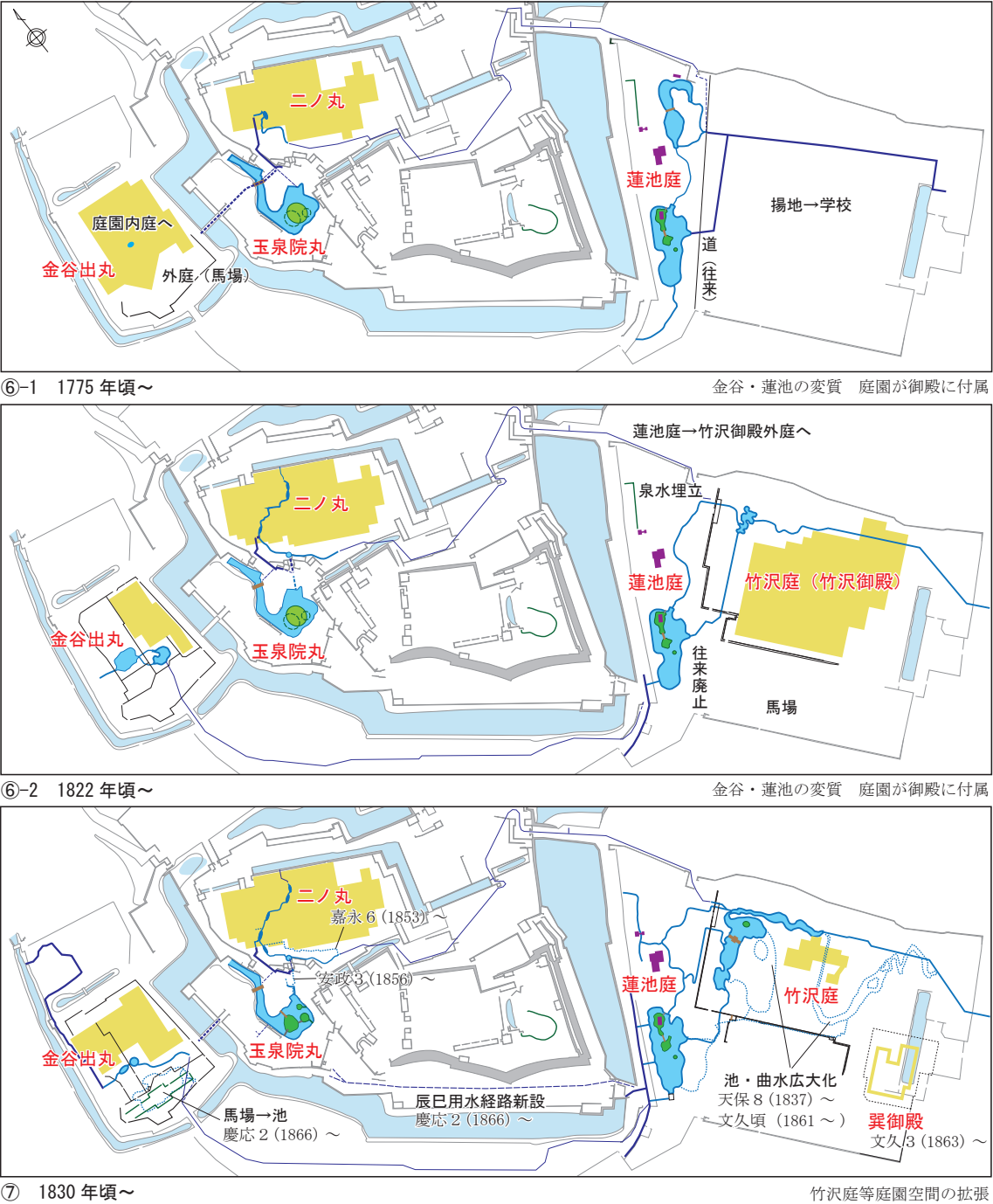


⑤ 1688 年頃～ (1726 年頃の推定景観)

金谷・蓮池の変質 書院・座敷の消失～御殿の隣接

凡例： ■ 御殿主要部 ■ 座敷・書院 ■ 亭
 辰巳用水 (庭園主要部以外) — 開渠 — 暗渠 — 形状不詳
 (同推定) (同推定) (同推定)

図5 金沢城庭園・御殿空間の位置関係と変遷 1



* 二ノ丸・玉泉院丸・金谷出丸：嘉永 3 年（1850）の景観を基本に作図。
二ノ丸は嘉永 6 年（1853）以降、金谷出丸関連は慶応 2 年（1866）以降の状況を一部表示。
* 蓮池庭・竹沢庭：天保 8 ～ 10 年（1837 ～ 39）頃の景観を基本に作図。
竹沢庭は文久（1861 ～）以降の状況を一部表示。

約 1/8,000

凡例： ■ 御殿主要部 ■ 亭
辰巳用水 開渠 暗渠 形状不詳
(庭園主要部以外) (同推定) (同推定)

図6 金沢城庭園・御殿空間の位置関係と変遷2

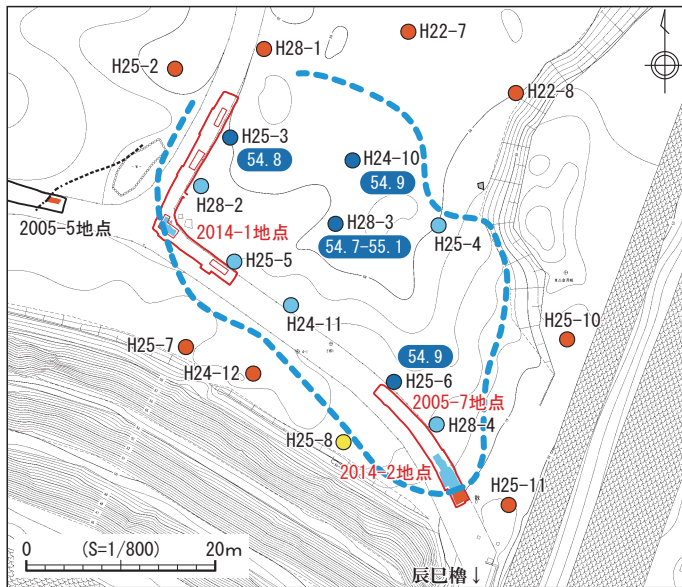


図7 東ノ丸南部池遺構平面図・景石写真

また東ノ丸南部池遺構（図7）は、推定規模長軸約50m、幅約30m、深さ約1.5～2mを測る。郭東縁の土塁状高まりの斜面を利用し、景石を配置している状況が確認された。

なお両者とも常時湛水していた明確な痕跡がない。本丸北部池遺構では、隣接して排水溝の可能性のある遺構も検出されているので、必要に応じて水を汲み入れていたのかも知れないが、はっきりしない。また庭園の位置からすると、前者は御殿「奥」側、後者は「表」側に属する。この段階では、御殿の表・奥ともに、池庭を伴っていたことになる。

寛永8年（1631）の大火により、本丸にあった御殿は二ノ丸へ移転した。両庭園もこの大火を契機に、名残を留めつつも埋め立てを受け廃絶した。庭園単独で存続することなく、御殿との一体性が強かったことが窺える。

（3）寛永8年（1631）以後～（図5③）

ー二ノ丸御殿への付属と辰巳用水ー

寛永8年の大火後、二ノ丸は大造成により拡張し、新たに御殿が置かれた。翌年には台地上の城内に水道が引かれた（辰巳用水）。堀や防火用と並び、庭園泉水への供給を目的としたと考えられる。

寛永15年（1638）、二ノ丸の脇に数寄屋を造営したとの史料があり、二ノ丸西部の小郭・数寄屋屋敷との関連も含め、庭園の存在を想起させるが、詳細は不明

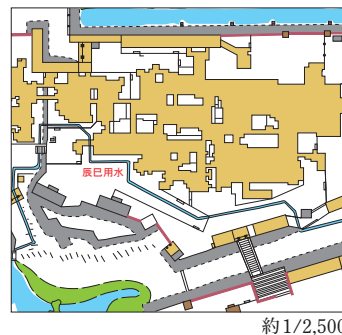


図8 二ノ丸庭園（18C前半）

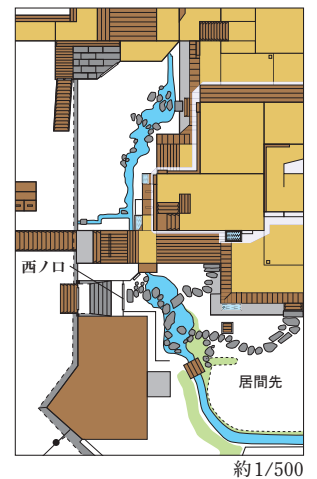


図9 二ノ丸庭園（19C半ば）

である。これとは別に、御殿と一体的な庭園空間が当初から成立していたと推定されるが、18世紀前半になると、文献や絵図から、御殿居間（中奥）先や中庭を縫うように流れる辰巳用水の泉水を中心とした、小庭園群の姿が明らかになってくる（図8）。以後時期によって経路の変動はあったが、御殿建物との一体性は近世を通じて保持された（図9）。

二ノ丸の西側、約16m下位に位置する玉泉院丸（2代前田利長の正室玉泉院の居宅が置かれたことに由来）は、元来二ノ丸との境をなす崖下に沿った南北方向の堀を伴い、城の外郭として、中枢部を守る防御機能を維持していたが、寛永11年（1634）、3代前田利常はこの地に庭園を設けた（図10・11）。これは二ノ丸の御殿

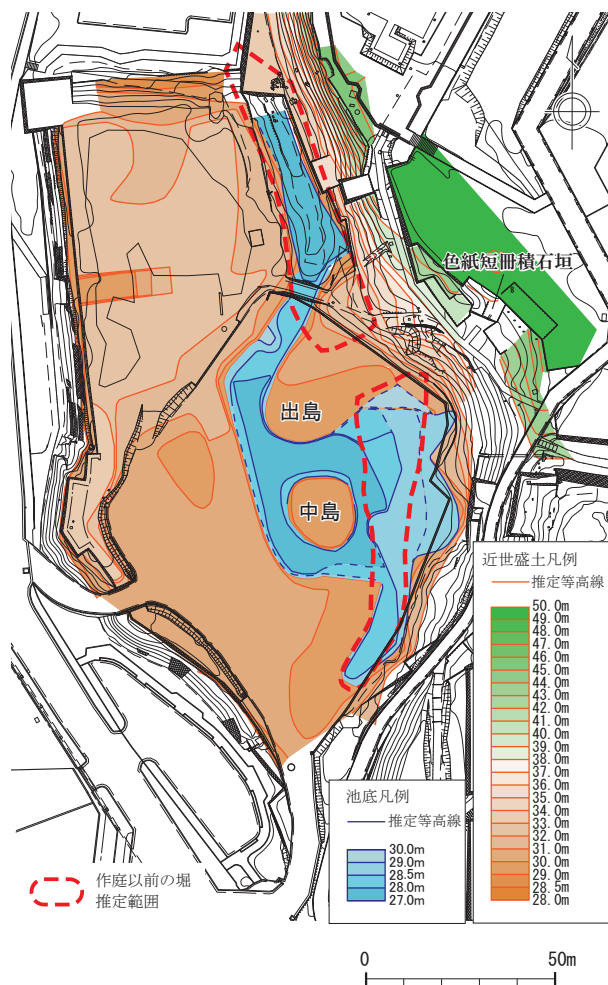


図10 玉泉院丸における池底推定等高線（古相）

敷地化に連動するもので、堀は埋め立て・拡張により園池に、堀の間の土橋は出島に改修された。そして郭自体、防御的・前線的な位置づけから、二ノ丸奥側に連絡する御殿背後の庭園空間へと変容した。ここに寛永期における城郭構造の変質と、庭園空間整備・配備との関連が看取される。

なお玉泉院丸庭園の池の水は、辰巳用水から供給されている。また池の南東岸・北東岸には石垣が築かれていて、池の水が石垣まで達していたことが確認調査により判明している。これらの石垣は最初から庭園の構成要素であったとみられるが、この傾向が一層明白になるのは次代の17世紀後半の改修時のことである。

（4）17世紀後半（図5④）

一金谷・蓮池に庭園主体の屋敷地成立一

金谷出丸（金谷屋敷）と蓮池庭（蓮池屋敷）は、ともに金沢城の外堀（いもり堀・蓮池堀）の外側に位置する。



図11 玉泉院丸庭園 池西部検出状況

このうち西側の金谷出丸では、万治3年（1660）の馬場造営以後、1680年代までに、貴重な書籍を保管する文庫とともに、書院（座敷）・亭・泉水等が整備された（図12①）。蓮池庭は城の南東側に位置し、崖のような急斜面も包括する変化に富んだ地形に立地した。延宝4年（1676）、作事所の跡地に造営された当初の状況は、藩士の日記等で知れるのみであるが、中心にはやはり「座敷」と称される建物³⁾があり、馬場・泉水・亭（数寄屋）等が備わっていた（図13、ただし17世紀末の状況を示す）。

「座敷」「書院」については詳細な史料が知られておらず、具体像は不明であるが、蓮池庭の「座敷」では、二ノ丸御殿改修中に藩主（5代綱紀）が政務をとったことがあり、ある程度の規模を有した施設と想定される。城郭中枢から離れた地点に、庭園を主体とする藩主の別邸的な空間が形成されたことは、城郭構造変容

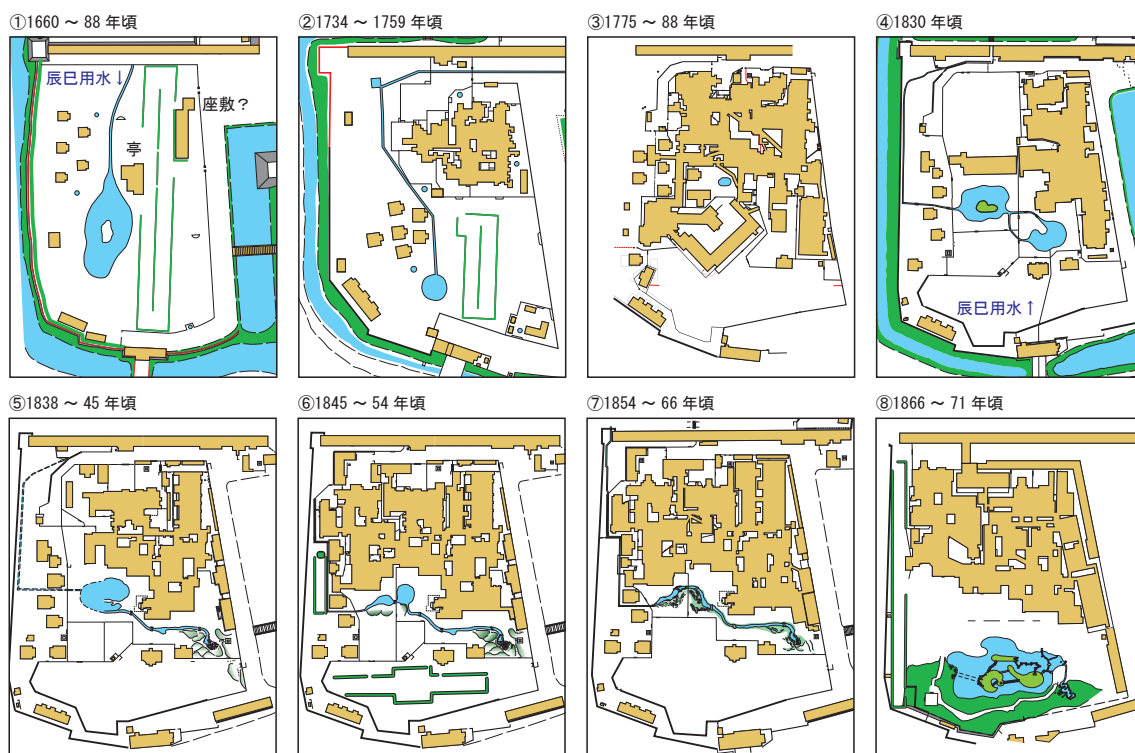


図12 金谷出丸の変遷

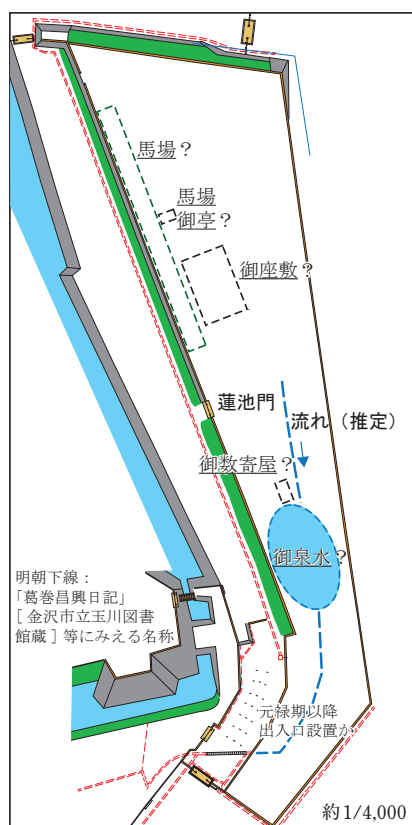


図13 蓮池庭 (17C末)



図14 色紙短冊積石垣

の新たな画期とも言える。また金谷・蓮池はそれぞれ変化を重ねることになるが、造営当初は共通した動向にあった。ともに辰巳用水が泉水の供給元であり、同用水は金沢城の庭園に欠かせない動脈となっていた。

前代に成立した玉泉院丸庭園は、寛文2～7年(1662-1667)頃、新藩主5代綱紀により大きく再整備された。池周囲の石垣は切石積に改修され、東部の二ノ丸との斜面には変化に富んだ雛壇状の石垣群が付加され、その中央にはとりわけ意匠を凝らした石垣(色紙短冊積石垣)が設けられた(図14)。一帯は辰巳用水が流れ落ちる滝として構成され、これらの石垣が滝石組・滝壺の機能・意匠を備えていた。意匠的な切石積石垣を庭園の主たる構成要素とする点は、城郭の庭園ならではの点であるが、全国的にも類例がみられないようであり、金沢城においても玉泉院丸一帯のみで確認できる事象である。

(5) 17世紀末から18世紀前半(図5⑤)

一金谷・蓮池の変質 書院・座敷の消失ー

元禄元年(1688)、金谷出丸において藩主の息女の屋敷が設けられた。これは通常の居住を前提とした本格的な居宅で、従前の「座敷」は取り込まれ、廃絶したとみられる。18世紀前半の絵図(図12②)によると、敷地北部には藩主一族の屋敷がある一方、南部は屋敷と堀で区画された状態で、泉水が存続している。泉水は馬場・文庫とむしろ一体のよう見え、庭園は明確に屋敷に付属しているようには窺えない。

蓮池庭の場合は、元禄9～10年(1696-1697)の一時期、5代綱紀が一時政務をとるなど、前代以来の状況がしばらく継続されるが(図13)、享保10年(1725)、藩主を継いで間もない6代吉徳の指示により座敷は一旦解体され、より簡素な亭として再建された。なお玉泉院丸庭園も、元禄元年に千宗室を奉行として新たに亭を設ける等の整備が行われたが(図15)、やはり6代吉徳の時に亭は廃絶し、庭園管理(露地方)の役所に改められた。このように当該期を通じ、金谷・蓮池において藩主の別邸的な性質ー居所としての機能ーは弱まったと言える。しかしながらとりわけ蓮池庭は盛んに利用されている。

(6) 18世紀後半～19世紀前葉(図6⑥-1・2)

一金谷・蓮池の変質 御殿への付属ー

安永4年(1775)、前藩主10代重教が金谷に退隠することとなり、従前の屋敷を大幅に改築した隠居御殿が造営された。この時点での庭園は、大規模な見物所を伴う能舞台と屋敷本体に抱え込まれ、小さな泉水が残る程度の内庭となっていた(図12③)。以後金谷の庭は、御殿への付属が明確となる。藩主世子や前藩主、



図15 玉泉院丸庭園(17C末)

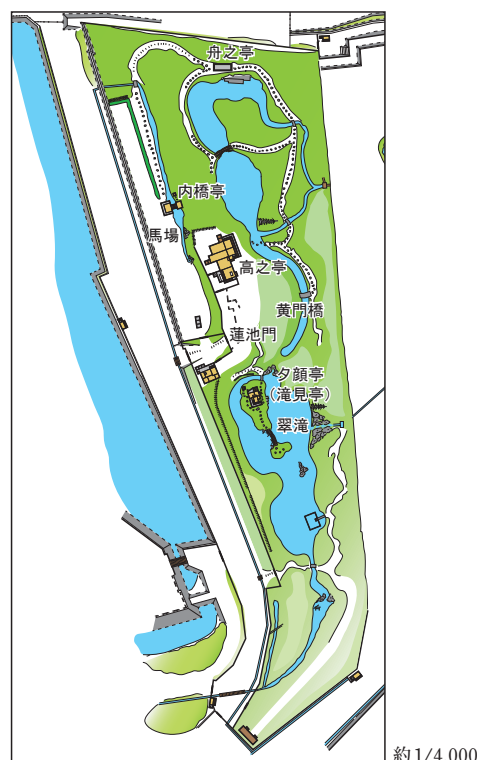


図16 蓮池庭(19C初)

その妻室等、主が変わる度に改修される御殿と一体的に、短期間で目まぐるしく形状を変えることになった(図12③~⑧)。

蓮池庭では、安永3年(1774)、11代治脩の指示により、池の中島に滝見亭(夕顔亭)が設けられ(図17)、併せてそれまで段落ちであったらしい滝が、落



図17 夕顔亭(滝見亭)

差6.2mの瀑布(翠滝)に改修された(図18)。寛政~文化年間(1789-1818)頃には、敷地の南北に池があり、高之亭(蓮池亭)・滝見亭・内橋亭・舟之亭の4つの亭や、長さ6mを超える黄門橋、越中の名所で最大級の刎橋・愛本橋に擬えた木橋等、多くの見所が点在していた(図16)。

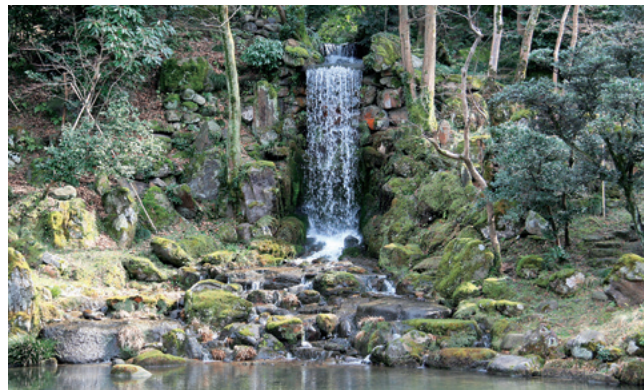
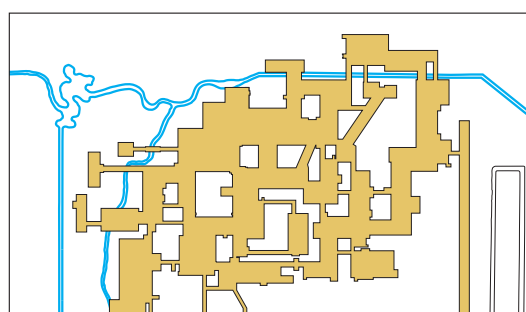
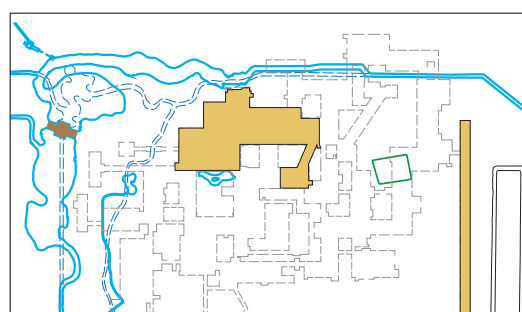


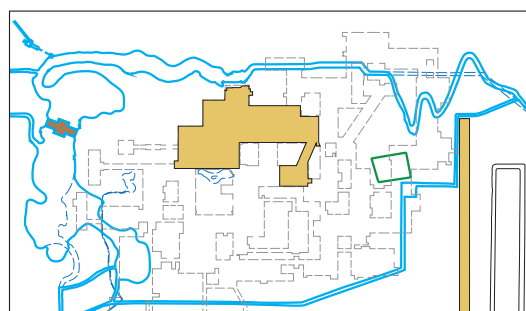
図18 翠滝



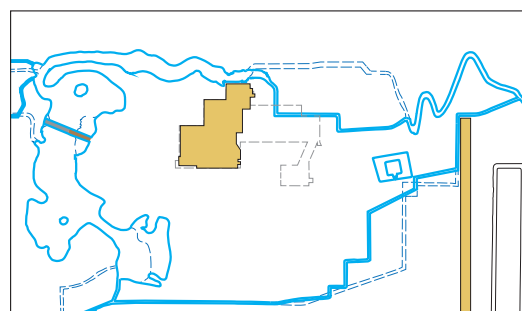
①1822 ~ 30 年頃



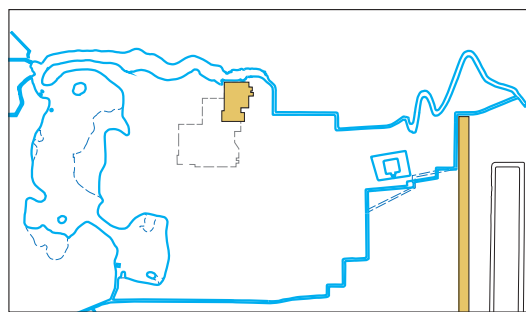
②1837 ~ 38 年頃



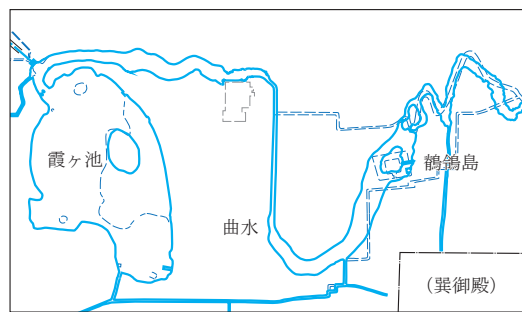
③1839 ~ 44 年頃



④1845 ~ 50 年頃



⑤1856 年頃



⑥1863 ~ 71 年頃

図19 竹沢庭の変遷(御殿建物・泉水)

約1/4,000

しかし文政2年(1819)、蓮池庭南東の高台において、12代斉広の隠居所・竹沢御殿が設けられることが決まり、翌3年には蓮池庭を外庭として取り込む目的で敷地間の道路が廃止された。このように蓮池庭も、金谷と類似した経緯を遅れてたどることになった。

竹沢御殿には、蓮池庭とは別に、辰巳用水の流れを主体とし書斎と一体化した内庭が備わっており(竹沢庭の原形)、当初はこの庭を兼六園と呼んだと考えられている。

以上のように、17世紀後半から19世紀前葉にかけて、城内中枢部から離れて庭園を主体とする屋敷が成

立し、その後藩主の別邸的な性質を弱めつつ存続するが、前藩主の隠居御殿が隣接して造営されるにあたり、御殿への付属が明確になるという大筋の傾向が認められる。見方を変えれば、二ノ丸に匹敵する隠居御殿の造営に際し、庭園の存在が呼び水となっているようにも見受けられる。

(7) 19世紀中葉以後(図6⑦) 一庭園空間の拡張―

文政5年(1822)から竹沢御殿に居住した前藩主斉広は、文政7年(1824)に急逝した。13代^{なりやす}斉泰の下、御殿建物は天保元年(1830)より取り壊しが始まり、内庭(竹沢庭)・蓮池庭とも、実質的に御殿付属の庭で



図20 雁行橋(亀甲橋)



図21 霞ヶ池



図22 兼六園(蓮池庭・竹沢庭)現況全体図・絵図照合図

はなくなったと言える。

以後断続的に行われた建物の縮小・撤去に応じ、比較的小規模だった竹沢庭は、池や流れを中心に形状が変容し、広大化が進行した(図19)。ただし橋等の施設が設けられては撤去されている通り、完成形に向けて一貫して修築が進められたようには窺えず、短い周期での意匠替えを重ねつつ、広大化が指向されたと思われる。現在、見所の一つとなっている雁行橋(亀甲橋)(図20)は、この間1840年前後の造営とみられ、亀甲形の橋板は、竹沢御殿に係る敷石の転用材である可能性がある。

万延元年(1860)には蓮池庭との間の門・塀が撤去され、庭が一体化し、文久3年(1863)頃以後、長軸120m近い霞ヶ池(図21)に延長約500mにわたって緩やかに蛇行する流れ(曲水)が取り付く、現在に受け継がれた広大な景観が成立した(図22)。

なお文久3年には、竹沢庭の南東に、前藩主継室の真龍院の最後の居所となった巽御殿が造営された。御殿には瀟洒な平庭が付属し、流れを茶室の土間に引き

込むという趣向がみられる。ただし御殿敷地は竹沢庭の一角に留まり、周囲を塀で囲い込んでいることから、御殿を主体として竹沢庭を付属させているようには見受けられない。

藩主斉泰は、竹沢庭のみならず、すでに廃絶していた本丸・東ノ丸を除く主要庭園にも大きな修築を加えている。二ノ丸では奥向部屋方敷地の一部を平庭とし、玉泉院丸では18世紀以後途絶していた切石積石垣による滝景観を再興した。また金谷出丸では真龍院や子弟の御殿・屋敷造営のたびに庭園を改修し、慶応2年～明治2年(1866-1869)には、自身の隠居に併せ、屈曲を重ねた段落ちの滝・雅楽の楽器や装束を象った中島・石造アーチ橋・装飾的な刳橋を配した泉水を中心に、大きく作り替えた(図12⑧・図23～25)。

このように藩政末期は、金沢城内外の各所において、庭園空間の比重が高まる傾向にあった。明治4年(1871)の廃藩置県により、藩主前田家は金沢を退去し、二ノ丸・玉泉院丸庭園はやがて廃絶したが、金谷出丸庭園、蓮池庭・竹沢庭(兼六園)は尾山神社及び石川

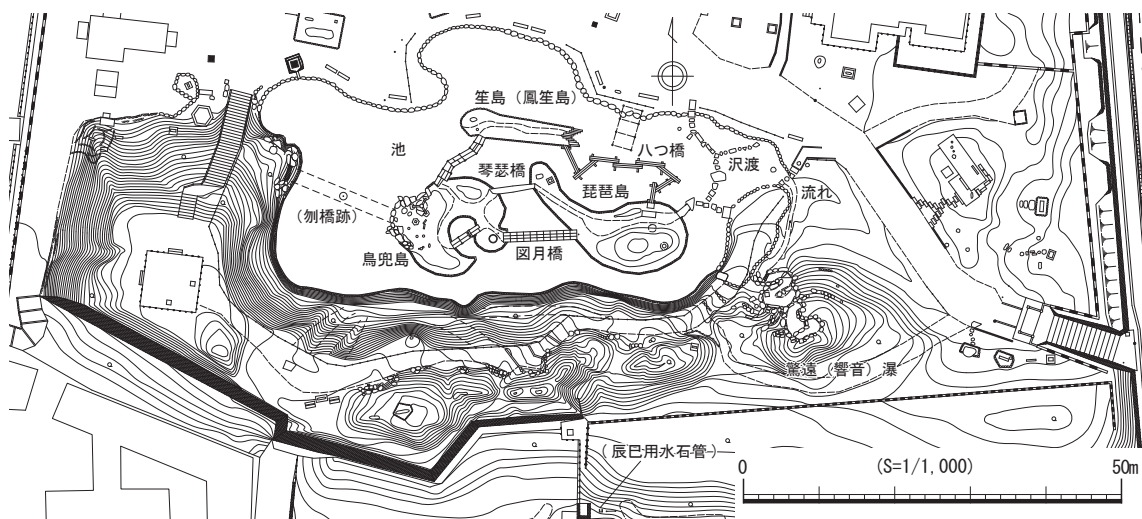


図23 金谷出丸庭園(尾山神社庭園・旧金谷御殿庭園)平面図



図24 笙島(鳳笙島)



図25 琴瑟橋(手前)・図月橋

県に継承され、現在に至っている。

おわりに

金沢城の庭園は、成立以来変遷を重ねてきており、それぞれの特徴も時間的経過を踏まえると一様ではなかった。またその動向は、必ずしも個別に収まらず、庭園どうし、あるいは御殿等とも関連しながら、城郭自体の構造変化に連動する場合も認められた。

本報告では、利用状況について十分に触れ得なかったが、ごく概略を述べると、金沢城の庭園にあっても、饗応の事例はしばしばみられるが、たいていの場合藩主の身内や慰労を目的とした重臣・近臣が対象であり、他の利用に比べ格別に比重を占めているようには窺えない。庭園ごとにある程度の傾向を示しつつ、饗応・遊興・武芸・狩猟・生産（田・畑）・資材管理の場等、多様な利用の在り方が見られる中で、やはり藩主個人や子女・夫人等、藩主家・一族と強く関わる「生活の場」としての側面が目立つ。

以上から、城郭の構成要素としての金沢城庭園の基本的な位置づけについては、形式化・格式化が進行する城郭内にあって、藩主個人の意向・嗜好を強く反映する、柔軟性を保った貴重な空間としての側面を強めていったとの見通しを持っている。頻繁な普請行為や、様々な利用に供される状況等も、このことと深く関連するように思われる。

【註】

- 1) とくに兼六園については長山直治氏をはじめ先学の優れた研究が蓄積されており、調査研究事業に際して多くを拠っている。
- 2) 同様の視点として三尾次郎氏の研究（「彦根城の空間構造の変遷－御殿と庭園を中心に－」『佐和山御普請、彦根御城廻御修復－発掘・解体調査からみえてきたもの－』彦根市教育委員会文化財部文化財課、2017）等がある。
- 3) 蓮池において、史料にみえる「座敷」の用例はごく少ないようであるが、多用される「屋敷」に対し、個別の建物・屋敷の一角を指すものと考えられる。

【主要参考文献】

- 1 石川県金沢城調査研究所『絵図でみる金沢城』2008
- 2 石川県金沢城調査研究所『金沢城普請作事史料1～5』

2013-2017

- 3 石川県金沢城調査研究所『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』2014
- 4 石川県金沢城調査研究所『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅰ・Ⅱ－』2015・2018
- 5 石川県金沢城調査研究所『金沢城総合年表 前編』2018
- 6 石川県金沢城調査研究所『金沢城庭園調査報告書』2018
- 7 石川県金沢城調査研究所『金沢城の庭園－その特徴と歴史－』（金沢城シンポジウム資料）2018
- 8 石川県金沢城調査研究所『金沢城編年史料 近世Ⅰ』2019
- 9 兼六園全史編纂委員会・石川県公園事務所『兼六園全史』兼六園観光協会、1976
- 10 瀬戸薫『「北信愛覚書」について－天正十五年の金沢城－』『加能史料研究』第12号、石川県地域史研究振興会、2000
- 11 長山直治『兼六園を読み解く－その歴史と利用－』桂書房、2006
- 12 橋本確文堂企画出版室『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』1997

【図版出典】

- 図5、6 下図原図「御城分間御絵図」[(公財)前田育徳会蔵] *庭園(泉水)、御殿建物等を模式的に表示
- 図8 原図「金沢城図」[金沢市立玉川図書館蔵]
- 図9 原図「金沢城二之御丸三歩碁図」B[石川県立図書館蔵]
- 図12 ①原図「金沢古城図」(金谷屋敷之図)[石川県立図書館蔵]、②原図「金沢城図」[金沢市立玉川図書館蔵]、③原図「金谷御殿絵図」[金沢市立玉川図書館蔵]、④原図「御城中壺分碁絵図」[横山隆昭氏蔵]、⑤原図「金谷御殿間取図」[金沢市立玉川図書館蔵]「御城分間御絵図」[(公財)前田育徳会蔵]、⑥原図「金谷御殿間取図」[金沢市立玉川図書館蔵]「御城分間御絵図」[(公財)前田育徳会蔵]「金谷御殿絵図」[石川県立歴史博物館蔵]、⑦原図「金谷御殿図」[金沢市立玉川図書館蔵]、⑧原図「金谷御殿図」(現況図合成)[金沢市立玉川図書館蔵]
- 図13 原図「金沢城絵図」[石川県立歴史博物館蔵] 構成要素の位置は「葛巻昌興日記」[金沢市立玉川図書館蔵] 他より推定
- 図14 奈良文化財研究所撮影
- 図15 原図「金沢城絵図」[石川県立歴史博物館蔵]
- 図16 原図「竹沢御殿絵図」[金沢市立玉川図書館蔵]
- 図19 ①「竹沢御殿御引移前総囲絵図」[金沢市立玉川図書館蔵]

館蔵]、②「金沢御城内外御建物絵図」[(公財)前田育徳会蔵]、③「竹沢御殿・兼六園并御鎮守古絵図」(竹沢御殿・兼六園)[金沢市立玉川図書館蔵]、④「御城分間御絵図」[(公財)前田育徳会蔵]、⑤「竹沢御屋敷総絵図」[金沢市立玉川図書館蔵]、⑥「兼六園図」[金沢市立玉川図書館蔵]等を参照して作成

図22 原図「兼六園図」[金沢市立玉川図書館蔵]、原図「竹沢御屋敷総絵図」[金沢市立玉川図書館蔵]、原図「巽御殿之図」[石川県立図書館蔵] 合成 1863～71年頃 現況測量図により調整

※本稿は、『金沢城庭園調査報告書』・『金沢城の庭園－その特徴と歴史－』の内容の一部を再編したものである。図版の出典もこれらによる（一部改変）。

表 1 金沢城庭園関連埋蔵文化財調査一覧

年度	地点	調査形態	主な遺構等	調査主体	文献
S43 (1968)	二ノ丸	発掘	辰巳用水木樋?	県教委・金沢大学	10
S64 (1989)	蓮池庭	発掘	屋敷跡 (庭園遺構不明)	県立埋文センター	9
H16 (2004)	本丸	発掘	池遺構	金沢城研究調査室	2
H17 (2005)	東ノ丸	発掘	池遺構	金沢城研究調査室	2
H18 (2006)	本丸	発掘	池遺構	金沢城研究調査室	2
H19 (2007)	本丸	発掘	池遺構	金沢城調査研究所	2
H20 (2008)	本丸	発掘	池遺構	金沢城調査研究所	2
H20 (2008)	玉泉院丸	発掘	池遺構・作庭以前堀	金沢城調査研究所	3
H21 (2009)	玉泉院丸	発掘・ボーリング	池遺構・出島・中島	金沢城調査研究所	3
H21 (2009)	竹沢庭	発掘	栄螺山石垣	金沢城調査研究所	1
H22 (2010)	東ノ丸	ボーリング	池遺構北側	金沢城調査研究所	2
H22 (2010)	玉泉院丸	発掘・ボーリング	斜面石組・滝石組	金沢城調査研究所	6, 3
H22 (2010)	竹沢庭	発掘	栄螺山石垣	金沢城調査研究所	1
H23 (2011)	玉泉院丸	発掘・ボーリング・高密度表面波探査	色紙短冊積石垣一帯・斜面滝石組	金沢城調査研究所	6, 3
H23 (2011)	竹沢庭	発掘	栄螺山石垣・石造物	金沢城調査研究所	1
H24 (2012)	東ノ丸	ボーリング	池遺構・周辺	金沢城調査研究所	2
H24 (2012)	二ノ丸	ボーリング	池遺構	金沢城調査研究所	3
H24 (2012)	玉泉院丸	発掘・ボーリング・高密度表面波探査	色紙短冊積石垣一帯・斜面滝石組	金沢城調査研究所	6, 3
H25 (2013)	東ノ丸	ボーリング	池遺構・周辺	金沢城調査研究所	5
H25 (2013)	玉泉院丸	発掘・ボーリング	石垣解体・土人形出土	金沢城調査研究所	4, 3
H26 (2014)	東ノ丸	発掘	池遺構 (斜面)	金沢城調査研究所	5
H27 (2015)	金谷出丸	発掘	(庭園遺構不明)	市埋文センター	11
H28 (2016)	東ノ丸	ボーリング	池遺構・周辺	金沢城調査研究所	5
H29 (2017)	数寄屋屋敷	発掘	切石積石垣基部	金沢城調査研究所	7
H30 (2018)	玉泉院丸	発掘	切石積石垣基部	金沢城調査研究所	8
R1 (2019)	玉泉院丸	発掘	色紙短冊積石垣基部	金沢城調査研究所	

文献 (報告書等)

- 1 石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所『特別名勝兼六園 栄螺山石垣等修理工事報告書』2012 年
- 2 石川県金沢城調査研究所『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』2014 年
- 3 石川県金沢城調査研究所『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅰ－』2015 年
- 4 石川県金沢城調査研究所『金沢城跡－玉泉院丸南石垣等－』2017 年
- 5 石川県金沢城調査研究所『金沢城庭園調査報告書』2018 年
- 6 石川県金沢城調査研究所『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅱ－』2018 年
- 7 石川県金沢城調査研究所『金沢城調査研究所年報 11』2018 年
- 8 石川県金沢城調査研究所『金沢城調査研究所年報 12』2019 年
- 9 石川県立埋蔵文化財センター『特別名勝 兼六園 (江戸町跡推定地) 発掘調査報告 - 附 本多家上屋敷跡試掘調査報告 -』1992 年
- 10 井上鋭夫『金沢城址の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会、1969 年
- 11 金沢市 (金沢市埋蔵文化財センター)『平成 27 年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』2016 年

表 2 金沢城庭園関連主要文献史料一覧

史料名	年代	所蔵	刊行等
加賀藩史料	内容：天文 7 (1538) ～明治 4 (1871)		8
北信愛覚書※	内容：天正 15 (1587) ～作成：慶長 17 年 (1612)	盛岡市中央公民館 (「北松斎手扣」「北松斎覚書」)	6
三壺閑書	内容：～万治元 (1658) 作成：元禄初期	石川県立図書館 森田文庫	4
政隣記	内容：天文 7 (1538) ～文化 11 (1814)		7
見聞袋群斗記	内容：文化 8 (1811) ～明治 4 (1871) 作成：明治 20 年 (1887) 以降		－
葛巻昌興日記	延宝 5 (1677) ～元禄 5 (1692)	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	－
前田貞親手記	貞享 3 (1686) ～元禄 14 (1701)		－
中川長定覚書	享保元 (1716) ～享保 20 (1735)		－
太梁公日記	明和 8 (1771) ～安永 4 (1775)	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	9
御造営方日並記	文化 6 (1809) ～文化 7 (1810)		5
成瀬正敦日記	天保 8 (1837) ～嘉永 6 (1853)		－
村井長貞日記	天保 7 (1836) ～天保 12 (1841)		3 (抄)
世子御座所普請方御用主附一件	弘化元 (1844) ～弘化 2 (1845)	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	2
官事拙筆	弘化元 (1844) ～嘉永 6 (1853)		－
御用方手留	嘉永 6 (1853) ～明治 7 (1874)		－
公私心覚	天保 15 (1844) ～慶応元 (1865)		－
金谷御殿御普請諸事留	慶応 2 (1866) ～慶応 3 (1867)	金沢市立玉川図書館 清水文庫	1
成瀬正居日記	天保 14 (1843) ～明治 34 (1901)	金沢大学附属図書館	－

※「北松斎手扣」を底本とし「北松斎覚書」等により校訂

刊行等

- 1 石川県金沢城調査研究所『金沢城普請作事史料 1』2013 年
- 2 石川県金沢城調査研究所『金沢城普請作事史料 2』2014 年
- 3 石川県金沢城調査研究所『金沢城普請作事史料 4』2016 年
- 4 石川県金沢城調査研究所『金沢城普請作事史料 5 三壺閑書』2017 年
- 5 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室『御造営方日並記』上・下巻 2003・04 年
- 6 瀬戸薫『「北信愛覚書」について－天正十五年の金沢城－』『加能史料研究』第 12 号 石川県地域史研究振興会、2000 年
- 7 高木喜美子『政隣記 從享保元年 到享保二十年』桂書房、2013 年、『政隣記 從延享四年到宝暦十年』2014 年、『政隣記 從宝暦十一年 到安永七年』2015 年
- 8 前田育徳会 (前田家編輯方) 編『加賀藩史料』(全 18 冊) 1929 ～ 58 年 (復刻版 清文堂出版、1970・80・81 年)
- 9 前田育徳会尊経閣文庫編『太梁公日記 第一～五』群書類従完成会・八木書店、2004 ～ 14 年